

光といのち

第113号

— お盆 —

2018年7月27日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

HP http://syozenji.or.jp/

住職 井上孝昌(釋孝昌)

法語

仏法には、明日と申す事、
あるまじく候う。
仏法の事は、いそげ、
いそげ。
『蓮如上人御一代記聞書』

お知らせ

水島見一先生のご出講が、諸般の事情で叶わなくなりました。軌道に乗りつつあるところで中止で残念ですが、この事態も訳なく存じますが、この事態も先生から教えていただいた言葉で言えば、「あたりもの」(如来からあたえられたもの)です。現在、新たな聞法会を開くべく思案中です。当寺が、浄土真宗の教えに生きようとする方々の聞法道場として機能できるように、今後も、ご助力をお願いいたします。



真宗大谷派では、毎年のお盆に、この切籠灯籠を吊ります。「お盆(盂蘭盆)」の意味「倒懸(逆さぶり)」を表しているといわれています。「房州切籠」は必要ありません。

日時
8月10日(金)
10時〜11時30分

盂蘭盆法要

内容
同朋唱和でお勤め
副住職の法話

NHKテレビの「チコちゃんに叱られる」という番組を知っていますか？私は、毎週楽しく観ています。
ところで「お盆」って何ですか？
このことを知らずに、やれ、迎え火だ、盆提灯だとか。私たちは、のんきなものです。チコちゃんに「ボーツとしてんじゃねえよ！」と叱られるそうです。
「仏法の事は、いそげ、いそげ」と申します。
特に新盆を迎えるご家族の皆様、これは大事なご縁です。奮ってお参りください。

7月1日(日) 奉仕作業



梅雨明けした夏空のもと、大汗をかきながらの作業となりました。お疲れ様でした。アオキの植栽 植樹した桜60本周辺の雑木伐採 参道草などの刈り 本堂庫裏のガラス拭きをしました。



山に入っていたと、聞いたことがあります。

昨年春に田中嘉一さん(ほとけがやつ)に自生するオシヨイツパを牛の餌にするために、農家の方々が側境界を生け垣にするためです。聖人(せいじん) 橋駐車場北

アオキ(オシヨイツパ)の植栽

- 写真に写っていない参加者
- 朝倉清 朝倉智 朝倉敏夫
 - 能重薫 田村徹夫 住職
 - 蓮沼美栄 長谷川吉枝 狩野昌也
 - 姫松実 明石義久 大胡登美子
 - 田村本 北村洋子 渡邊秀子
 - 能重美恵子 蓮沼典子 中川克子
 - 池貝房子 鈴木正一郎
 - 川名利幸 二列目右から
 - 重田和夫 高梨維夫 中山郁夫
 - 朝倉和利 高梨真一 坊守
 - 釜居政男 三堀清 川名喜昭
 - 峯信一 田中嘉一 田村晋一

なぜ仏法を聴聞するのか？

水島見一先生をお招きして今まで四回にわたり、仏法聴聞をしてまいりました。

新たな聞法会を計画するにあたり、なぜ仏法を聴聞するのか？

このことを共に再確認しようと思いい、この文章を掲載しました。

なお、テキストは今までと同じ『歎異抄 白日抄』を使用する予定です。

1 現代社会と仏道

親鸞が明らかにされた仏道は、過去から今日までの無数の先学や先達方によって受け継がれてきていますが、それが次第に見失われつつあるように思います。私の生活を顧みましても実に呑気なもので、何と求道に縁遠い生活だなあ、と驚かざるを得ないのです。現代は便利で快適ということがモットーとされていますが、その便利と快適が、私たちを仏道から遠ざけていられると思わざるを得ないのです。かつては「貧」「病」「争」という生活苦が人々を宗教に駆り立てたと言われていますが、現代では、たとえば少し前に「一億総中流」と言われていたように、生活苦そのものが少なくなっているように思います。しかし、人間が生を享けた限り持たざるを得ない「空しさ」というもの、あるいは「孤独感」といったものは、何一つ変わっていないのです。

人間の最大の苦は、「私が死ぬ」ということでしょうか、その「私が死ぬ」ということも、ターミナルケアなどの発達によって、ずいぶんと苦痛が緩和される時代になってきました。ですから、死が近付いてきたらそういう緩和治療を受ければいいので、死ぬ直前までは健康に留意して快適な生活を送りたい、というのが、多くの現代人の考えることだと思います。

しかしその一方で、自殺者が年間三万人を超えているということも現代社会の抱えている大問題でしょう。特に六十歳以上の高齢者の自殺が、最近の統計では十万人あたり二十一人ということ、深刻な社会現象となっているのです。長生きするのも大変な時代でありまして、たとえば老老介護というものも現代の日本社会における大きな課題になっています。『大経』下巻の三毒五悪段にあるような、

人、世間の愛欲の中において、独り生じ独り死し独り去り独り来りて、行に当り苦楽の地に至り趣く。身、自らこれを当くるに、有も代わる者なし。

（『真宗聖典』六〇頁）

という事実は、いかに便利で快適な現代社会においても、決して免れることのできないものである。このように私たちの人生は、根源的に「空しさ」とか「孤独」というものを抱えているのです。そしてその「空しさ」や「孤独」は、「私が死ぬ」ということによって引き起こされているのです。

死ぬことが与えられているから、私たちは自分というものの存在意義を確かめたいのではな

いでしょうか。私が人間として生まれたことの意味を知りたい。ここに私たちの根本的な要求、つまり宗教心があるのではないのでしょうか。この宗教心を切り開くことが、現代人の火急の課題のように思います。

真宗大谷派は「生まれた意義と、生きる喜びを見つけよう」という標語を掲げています。これは、現代社会においては実に重い言葉なのです。私たちは、この世に生まれてきて満足だということ、心の奥底から言いたいのですが、それがわからないのではないのでしょうか、「人間として生まれて良かった。このような時代に、この家に生まれて、この伴侶を得て、そしてこのような子どもを授かって、そんな私で良かった」と言えるような人生を送りたいのではないのでしょうか。あるいは、病気をしたり不幸な事件に遭遇したりしても、最終的には、「それで良かった」と言えるような人生を送りたいのではないのでしょうか。そのためには、「生まれた意義と、生きる喜び」を、自分の中にはっきりさせなければならぬのではないのでしょうか。

2 後生の一大事

そのためには、聴聞の場に足を運ばなければなりません。それも、暇な時に聴聞するというのではなく、どんな忙しい用事があっても、それを差し置いてでも聴聞するという意欲が必要のように思います。自分の都合に合わせた聴聞ではなく、また自己保身のための聴聞で

もなく、そんな身勝手なことを考える自分という殻を破って聴聞するのです。「後生の一大事」という言葉がありますように、人間として生まれた限り、何としても一度は「生まれた意義と、生きる喜び」を自分のものにしなければならぬのでありまして、そういう人生の一大事を何としてもわかろうという宗教心の躍動です。ここに求道の第一歩があるのです。

高光大船に師事した石川県松任(現白山市)の坂木恵定先生が、ある法座でこういうことを言っておられました。「あなたたちの中で法座に来たくないのに来た人もあると思うが、ここに足を運んだというだけで九割は救われているんだ」と。イヤだイヤだと思いつつも法座に足を運んだだけで、九割は救われているのだ。しかし、残りの一割が実は大変なのです。残りの一割、つまり信心をいただくということが、なかなかの難事でありまして、イヤだという思いを破って聴聞の場に足を運ぶということは、そのためのものであります。信心という残りの一割をはっきりさせるためには、自分の都合を顧みないで求道するという決断が必要なのです。そういう決断があれば、九割は救われたと。ここではじめて、残り一割の信心獲得の悪戦苦闘がはじまるのではないのでしょうか。闘いがあります。信心獲得の闘いです。清沢満之であれば、当時の死に病であった結核の身を抱えて「自己とは何ぞや」と問い続け、その中からの「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾に此境遇に落在せるもの」という自己を発見されました。絶対無限に乗托する自

己の発見のために、清沢満之は実に激しい求道を実践されたのです。

さらに親鸞であれば、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

(『歎異抄』『真宗聖典』六四〇頁)

と言われるような、そくばくの業を抱えた私であり、そのような私一人において弥陀の本願をいただいた、という自己の発見でしょう。「罪悪深重煩惱熾盛」と言わざるを得ない自己において如来本願のはたらきをいただいた、ということ。このような自己の発見が聴聞です。聴聞して、宿業の身の私ということが知らされると同時に、その身は本願によって証明されている自己であったと知らされるのです。求道において私たちは救われたい聞の中の自己を知ると同時に、その聞の自己だからこそ如来のはたらきを実験することができのです。宿業の身こそが如来のはたらきの場所であった、との自覚です。蓮如でいえば、阿弥陀如来が我が宿業の身において「ご身勞」しておられるということです。ここに聴聞の関門があります。

かつては、「仏道のためには、たとえ食わなくても良いのだ」という思いをもって求道する人がたくさんおられました。高光大船は、「食べていくために働くのが忙しくて仏教を聞いている暇などない」と言う人に、「あなた、何故食べるのか」と問うのです。その人は当然、「それは生き

るためです」と答えるのです。「そう言うけれども、あなたは食べても死ぬだろう。むしろ、食べなくて死んだ人はそういうないよ。それよりも、食べて病気になるって死ぬ人の方が多いのではないですか」と言うのです。高光大船は、聴聞より仕事優先、つまり食べることを優先する人に向かって、「あなた、それで良いのですか。大切なもの、忘れていませんか」と警告しているのです。私たちは、一生懸命健康に気を使って、日頃から食べ物を選んで食べているかも知れませんが、それでも一日一日間違ひなく死ぬ方向に向かって進んでいるのです。健康に気を使った人が長生きするとも限りません。また長生きしても幸せとも限りません。人生の実相は空しいに違いないのですが、私たちはそれに目をつむっているのです。

ですから、食べることよりも仏法が大事だということ。三帰依文で言いますと「大道を体解して、無上意を發さん」という意欲的な聴聞をせよ、ということ。そういう先達方の不惜身命の聴聞道によって、今日の私たちにまで仏法が伝えられているのでしょうか。ここに、最初のテーマを「求道」とした意味があります。

現代ではそのような聴聞が、きわめて少ないように思えるのです。聴聞そのものが難しいのではなく、私たちの便利で快適を求めたいという思いが、聴聞したいという意欲を上回っているのです。だから教養仏教はさかえますが、それは人間のアクセサリーです。現代はアクセサリー・仏教が全盛の時代になっているのです。

(『苦勞はいもんや 聞法の生活』水島見一より)

**第五回水島見一先生闍法会
中止の経緯を副住職が説明**



中止の知らせが行き届かずお越しになる方もいらつしやるかもしれないので、副住職は京都から戻り、経緯を説明し謝罪しました。写真上は、「予定していたので」とお越しになった湯川敬之氏ら「遊子の会」12名です。これもご縁です。で、住職が一時間半ほど法話させていただきました。写真下は、翌日の「月曜朝」のお朝事風景です。この日は総勢17名となりました。住職は内陣、副住職と衆徒鈴木正一郎氏が外陣でお勤めしました。

**2018年東京教区
親鸞聖人につどう同朋大会**

六月六日(木)、東京「文京シビックホール」に関東一都六県と山梨県長野県から千人を超えるご門徒が集まりました。当寺からは、写真前列右側から

川名ふじ子 関口昌司
渡邊 秀子 田中嘉一
田村喜代子 後列 金木庸一
田村晋一 鈴木正一郎の各氏と住職が参加しました。参集したご門徒全員で、正信偈などを同朋唱和し、芹沢俊介氏の「家族と親鸞」というお話しを聴きました。ふだんでは味わえない大勢の御同朋御同行と時空を共にする喜びの場でした。



**お地藏さまと二部地区
戦没者の合祀墓の整備**



真宗大谷派寺院に奉安する本尊は、南無阿弥陀仏を表現した阿弥陀仏立像です。それ以外の仏像は奉安しません。また戦没者を英霊(すぐれた人の霊魂)として慰霊する教えはありません。亡き人は皆、諸仏の一人として仰がれる存在です。ところが当寺には、お地藏さま(写真上)や英霊碑(写真下)があります。お参りする方の要望もあり、お地藏さまの祠(ほこら)を修理し賽銭箱を新設しました。また慰霊碑は、花立てを修理し、その修理をお願いした石屋さんから、石製の立派な賽銭箱が寄進されました。

「このような英霊碑を見るたびに、若い頃に体験したあの戦争が思い出され、平和の尊さや非戦の思いを新たにしている」と、その石屋さんは語っておられました。英霊碑がご縁となり、今まで知らなかった石屋さんの人間に触れる、温かく豊かな時間をいただきました。

行事予定

- 月曜日 6時30分〜 お勤め練習
 - 8月10日 10時〜 孟蘭盆会
 - 9月23日 10時〜 秋彼岸会
 - 10月1日 13時〜 親鸞教室
 - 10月7日 14時〜 同朋の会
 - 10月10日 13時30分〜 役員会
 - 10月21日 13時30分〜 世話人総会
 - 11月12日 13時30分〜 仏具御磨き
 - 11月16日 13時30分〜 準備
 - 11月16日 15時30分〜 報恩講速夜
 - 11月17日 6時30分〜 報恩講晨朝
 - 11月17日 10時30分〜 報恩講日中
 - 12月12日 13時〜 親鸞教室
 - 12月16日 14時〜 同朋の会
 - 12月31日 23時45分〜 除夜の鐘
 - 1月2日 10時〜 修正会
- ※・以外は当寺が会場です。

同朋の会後の暑気払いでのこと。大工の棟梁の座を退いた方が「俺の時代は俺のやり方があった。倅は倅のやり方でこれからの時代を渡っていくだろう」と。さらに、「大工は、家を建て終わりではない。アフターケアが肝心」と。まだ私は代を譲りませんが、寺も同様だと教えられました。時代相応のやり方を工夫する必要はあるし、お葬式が済んで終わりでない。アフターケアが必要。それが法事だと。